



經典餘師

孟子

六

11  
2047  
6





2.047  
6

孟子朱喜集註

梁惠王

章句上

孟子曰梁の惠王と見王の曰く叟千里と遠とせ不して来る亦將よ以て吾國と利する有んと將乎

孟子對て曰く王何ぞ必ら利と曰ん亦仁義有而已

孟子朱喜集註

溪世尊 譯

梁惠王章句上

惠王ハ魏の國の君として自ら僭し王と稱するの此時天下

乱世にて天朝の天正年中の如く諸侯伯天下を壅クテ少く此時賢者名將のよきとある者と惠王より敬ひ召寄らる

孟子見梁惠王曰叟不遠千里而來

亦將有以利吾國乎

孟子始りて梁へ至りて曰く叟

今千里を不遠せで來臨ありて定て妙計ありて吾國を勝利する事を巧むる有とかな

孟子對曰王何必曰利亦有仁義而已

矣 孟子の御對より利欲としかる者ハ人の君として上より立

王曰何以利吾國大夫曰何以利吾家

孟子朱喜集註

玉泉集官藏







孟子梁の恵王と見王沼の上立て鴻雁麋鹿を顧みて曰く賢者も亦此を樂む乎孟子對て曰く賢者に後此を樂む不賢者ハ此有と雖ども樂まざる詩云く靈臺を經始と之を經之を營まじ庶民之と攻日まじ不して之を成經始亟やかること勿き庶民子のく來る

○孟子見梁惠王王立於沼上顧鴻雁

麋鹿曰賢者亦樂此乎又或曰惠王花園沼の上は逍遥みて鴻雁の

孟子對曰賢者而後樂此不賢者雖有

此不樂也孟子の御答小真は物を樂むといふハ賢徳ある者の事たり不徳不賢なる者ハ一ケ様の口

詩云經始靈臺經之營

之庶民攻之不日成之經始勿亟庶民

子來此段ハ徳有人の樂ハ真の樂なる所以を説く是詩ハ詩經の中に文王の臺を經營ありて文王も樂まらん

國民の者も歡有難此の義なり其臺ハ物見らる此詩の心ハ文王の内は臺を經始ありて經營ありたる然るに庶民

百姓あれを聞て有難君なりとて多くの民ども群集するて之を攻りとなり其時文王より御さる仰出され有て曰く必竟思付

王靈囿に在る鹿の伏所鹿鹿濯濯白鳥鶴鶴於初て魚躍

王在靈囿鹿鹿攸伏鹿鹿濯濯白鳥鶴鶴王在靈沼於初魚躍

文王民力以て臺を為沼と為て而して民之を歡樂其臺を謂て靈臺と曰其沼を謂て靈沼と曰其麋鹿魚鼈電在と樂む古之人民與偕に樂む故がゆへに能樂しむ

右臺出來の上文王遊覽の處を述るなり靈囿の名なるその場在のりて遊覽の鹿鹿或ハ伏又ハ戯居てい何も濯濯と肥り白鳥鴨等ハ毛色鶴々たるなり又沼の上を覽ぬハ魚物して躍遊ていゆるその文華なる景色をのべて文王の徳の形容詞なり

五ノ一



樂也

上ハ詩の詞なり是より孟子詩の心を述ぶる如く文王と曰く民の力小依て臺沼園を經營する同事

なり然れども其下の庶民歡たのむ者ハ是常仁を施すのみ民の憂事ハ憂のみ民も又王の樂を偕は樂といふ者

湯誓曰時日害喪予及女偕亡民欲與

之偕亡此段ハ又不徳無道なる者ハ樂む事能はざるを述ぶる

萬民誓ひを以て湯誓といふ是時祭王惡逆長じて我と謀る

人向て曰く我天子の身なれば日月と齊きあり時日輪害乃

時々消喪人や日の消失する時あり偕亡とある人となり女

とは日を指していつなり然るに之を傳聞して萬民怒りて

曰く大抵勿れ共祭王の亡のみとならば若く

雖有臺池鳥獸豈能獨樂哉

若くは民の恨怒を得ば臺池ありて鳥獸の謀めありと

雖も獨樂ひと能はざらん

○梁惠王曰寡人之於國也盡心焉耳

矣河内凶則移其民於河東移其粟於

河内河東凶亦然於てハ心の盡用する事なり

領地の内小して唇ハ河内の土地り凶年饑饉する人飢は其

河内の民を物入大儀とありて河東へ住居を移し河東のよく

出来の米粟を河内へ運移して民を救ふなり又河東凶年の

時にも然例なり寡人とハせつゝ徳寡人あり心よく舉げ

察鄰國之政無如寡人之用心者

-5 288 35 910" data-label="Text">

鄰國之民不加少寡人之民不加多何

梁の惠王の曰く寡人之國に於て心と盡すも耳河内凶則ち河東に移し其粟を河内に移すも亦然也

若くは民の恨怒を得ば臺池ありて鳥獸の謀めありと雖も獨樂ひと能はざらん

○梁惠王曰寡人之於國也盡心焉耳

矣河内凶則移其民於河東移其粟於

河内河東凶亦然於てハ心の盡用する事なり

領地の内小して唇ハ河内の土地り凶年饑饉する人飢は其

河内の民を物入大儀とありて河東へ住居を移し河東のよく

出来の米粟を河内へ運移して民を救ふなり又河東凶年の

時にも然例なり寡人とハせつゝ徳寡人あり心よく舉げ

察鄰國之政無如寡人之用心者

鄰國之民不加少寡人之民不加多何

也

百姓加少といふ事なく寡人の民も多しむ多しむなり得

湯誓曰時日害喪予及女偕亡民欲與之偕亡

臺池鳥獸有と雖も豈能獨樂哉

鄰國之政と察に寡人之心と用るが如くさる者無鄰國之民少かると加へ不寡人之民多しむを加へ不何ぞ











# 斯天下之民至焉

今時ハ君ハ人皆合戰を好む他の國を奪ふと行ひ奢り欲を縦に拘彘をよき養ふ其他美味と極て却て万民を惠むを致す是狗彘人の食と與食せしめて人を飢えしむ者なり誠は今と知れ檢よきことなり

飢莩あきども徒倉小糶米ハ貯る是を發て施すと云ふはさるる小人死する時ハ口給をさるて曰く我所為ハあきと成る

饑饉ゆかりといひ譬ハ人を刺殺て我非これ兵刃に為るなり曰小異るは今惠王も此理を悟て罪と凶歳は記ハば勿ち斯は天下の民帰服のころ

## ○梁惠王曰寡人願安承教

此段ハ惠王上の意を受ての詞なり寡人願ハ心をと安置て教を承べし憚む委曲を示めんと云ふ

孟子對曰殺人以挺與亦有以異乎曰

無以異也

命と失ふふ於て以刃與政有以異乎曰無以異也

有飢色野有餓莩此率獸而食人也

曰庖有肥肉廐有肥馬民

獸相食且人之惡之為

民父母行政不免於率獸而食人惡在

孟子曰明乎小説のふ右人の命と失ふふ於てハ挺ハ政どの三ツまがら同ト事なりとあまハ王もまがら同ト咎あり今王の庖厨は狗彘の養味肥肉あり廐ハ物入なる弊をかり肥ハ馬あり然ハ民百姓ハ飢人餓莩あるハ譬ハ右の狗彘又ハ肥馬ハ率來て民を食物といふことなり

梁の惠王の曰く寡人願ハ安んじて教を承ん

孟子對て曰く人殺之挺と刃を以てセバ以て異る

と有乎曰く以て異かるしと

刃と政と與と以てセバ以て異かるし

有乎曰く以て異かるしと無

曰く庖は肥肉有廐は肥馬有民は飢色有野は餓莩有此獸と率て人を食し

獸相食且人之惡む民の父母と為て政と行ひ



食しむるを免る  
不悪くぞ其民  
の父母と為る在  
仲尼の曰く始て  
備を作る者其  
後無らく乎其人  
象ぞて之を  
用るが為る

之を如何を其斯  
民よて飢て死  
使

其為民父母也

相食合と紀人く傍より之を見て退ぬ

方と悪ハ人情とを同トと然ハ君ハ万民の父母なるに政道の所  
行右の如く獸を率來て人を餌食とするの理を免る者あり  
悪く民の父母といふ  
名目在やとたり 仲尼曰始作俑者其無後

乎為其象人而用之也

孟子猶聖人の語と引て  
説りしかの俑といふ者を

仕物一者ハ身の罪に由りて其後だん絶せざる人乎と云  
俑ハ竹田  
筑後ノ用る人形なり古ハ人を葬る草人形と屬て死人の從衛と  
いふ事一是古礼なり世次第に委くならうて俑を用るとは  
ぬ聖人こそと不仁なりと悪くハ母の如く後世の悪王自己が死  
するの時召遺愛する処の男子義女を毎体に埋るとはなうなり  
是を以て聖人其人ハ象の委るを惡くよとの義なり今  
江都狗死を禁じりて益益なるとありとの事誠ニ御仁徳  
よて聖人と同一意旨なり

如之何其使斯民飢而死也

梁の惠王の曰く晋  
の國天下焉より強  
とハ莫叟之知所  
及で東齊に敗き  
て長子死と西地と  
秦に喪かす七  
百里南楚に辱し  
めらるる寡人之と耻  
願くハ死者の比  
一之を酒ぐん  
之を如何して則  
はら可なり

聖人の意右の如く況や民の父母なるれ身にして坐して死さ  
しむと忍んやとたり 仲尼ハ文宣王の御字あり

○梁惠王曰晉國天下莫強焉叟之

所知也及寡人之身東敗於齊長子死

焉西喪地於秦七百里南辱於楚寡人

耻之願比死者一酒之如之何則可

惠王ハ魏の梁といふ土地は都を魏ハ本晉の地なり故に晉といふ  
かり惠王の物語はこれ我國前より勢強より一事ハ叟も  
兼て知るなり然ハ寡人の身は及で東の方ハ齊と戦ひ敗  
らして長子死さすと西ハ秦の大將は七百里切取ると南ハ

毎々楚の國より掠辱をせしむるとたり寡人甚残念と思ひ耻  
しむる願ハ何とぞして右の度毎に討死する者の比は怨を酒  
ぐん如何なり 季子對曰地方百里而可以

孟子對曰曰地  
方百里にして以て  
王する可

孟子對曰曰地

方百里而可以

王する可



王如仁政を以て民を施し刑罰を省き税斂を薄く深耕易耨を以て其孝悌忠信を修め入て以て其父兄を事出で以て其長上を事扱を制して以て秦楚之堅甲利兵を搃使可

耕耨して以て彼其民の時を奪

其父母を養ふとを不得使父母凍餓兄弟妻子離散

彼ハ其民を陷溺と王ハ往て之を正セバ夫誰と王與敵ヤん故ゆへ曰く仁者小敵を王請疑

王孟子對のふハ今歸服せむ親ざる人衆を以て人と争ふ無益

王如施仁政於民省刑罰薄稅斂深耕

易耨壯者以暇日修其孝悌忠信入以

事其父兄出以事其長上可使制挺

以搃秦楚之堅甲利兵矣

今も早く仁義の政を施し人を刑罰のよきことと省るる

稅斂を薄くして農民ハ深く土地をたぐり草を易耨して壯者

者の心は修め家小在てハ父母外ふてハ年長上る人ハ事しやうに

して君より下を仁と親と下民ハ忠と孝との道を辨へ君臣のころ

ひとらちちるたる其勢を以てセバ譬バ兵刃を用ふるも及んで挺を

制してそとを以て甲と堅兵を利 彼奪其民時使

不得耕耨以養其父母父母凍餓兄弟

妻子離散その理如何とされハ彼秦楚ハ限む他の敵國

妨げ中々耕耨間もなく軍用小とく命を失ひ父母妻子の

養を顧る事かこし老る者ハ自然と奔走して餓死及び

若もそのハ他國ハ離散ふるして兄弟妻子一所集ふことを得

たといハ天朝の應仁年中れれを見ん 彼陷溺其民王往而征之夫誰與王敵

かく國々れれ万民を宥へ陷るる水は溺るる困窮たる

所ハ君臣合睦命を惜ざる軍兵を以て往て征伐のハ

誰り以て王と敵對 故曰仁者無敵王請勿疑

孟子も古語を引て喻めぬの仁者に敵るるとハ此義を

孟子見梁襄王出語人曰望之不

孟子

九

孟子集注







あつて人ハ

齊の宣王問て曰  
齊桓晋文之  
事聞とを得可  
乎

孟子對へて曰く  
仲尼之徒桓文之  
事を道者毎是  
を以て後世傳る  
と毎臣未だ之を  
聞未以と毎則  
はら王乎

曰く徳何如則  
はら王乎  
曰く民を保して  
王は之を能禦  
ぐと莫らん  
曰く寡人の若き  
者以て民を保じ  
可哉曰く可なり  
曰く何由て吾  
可なるを知らん  
臣之を胡斷し聞

曰く王堂上坐と  
牛を牽て堂下と  
過る者有王之と  
見て曰く牛何小

○齊宣王問曰齊桓晋文之事可得聞

乎宣王の可なり齊の桓公晋の文公ハ昔乱世に在てよく

孟子對曰仲尼之徒無道桓文

之事者是以後世無傳焉臣未之聞也

無以則王乎孟子對りてハ聖人の門徒ハ朝者ハ

聞るるを以て王たるの道を説く人なりと云ふ

勢と振一人なり魏の曾操 天朝の武田信玄公織田信長公の

類る仁義の名を假りて是を霸道といふ堯帝舜帝禹王

曰徳何如則可以王矣天王應神天王の諸尊

曰保民而王莫之能禦也宣王問りて曰く

大徳を行ひて寡人の輩何如る徳を以て王と

人なりと孟子の曰く別義ありと云ふ仁愛を深く用ひて民を

保するは王たるべし曰若寡人者可以保民乎

哉曰可曰何由知吾可也曰臣聞之胡

斷王又曰く則ち其民を保むべしと云ふ事實寡人が死す者

寡人が為人として成る徳ありとハ先生何由よ知のやと云ふ

曰く他はしもなく家臣胡斷する王の徳を傳聞しこの有

曰王坐於堂上有牽牛而

過堂下者王見之曰牛何之對曰將以



之對て曰く將よ  
以て鐘一響ふん  
將王の曰く之を舍  
よ吾其殺鯨と  
て罪無して死地  
小就若く若くたるに  
忍び不對て曰く  
然らば則ち鐘に  
響ふを廢せん與  
曰く何ぞ廢と可  
半を以て之易  
よと識不有諸

響鐘王曰舍之吾不忍其殺鯨若無罪  
而就死地對曰然則廢響鐘與曰何  
可廢也以羊易之不識有諸  
胡齋の語ふ之ハ一とセ王堂上坐のひし時御めどや小牛と牽て  
過りのあり王のめふハ何つとせ之よや對て曰く響ふんとのハ響  
とハ鑄をなれよ或ハ撞鐘釜及一切その類ハ大抵苦勞と尽  
成就の時めやうとて却出來てが弊とならんといふその時牛の  
血を取て塗と死ハ即ち害なり是が為なり時小王の曰く舍之  
吾今牛を見よ畜類のと言ふまじも自然と心を通て無罪  
死とて之れ殺鯨と哀なる見よ忍びざる一牛客對て曰く然バ  
今より此業を廢せんとす王の曰くそれれもまた産業にかつ事  
かろ廢べしとハ非りや異きん羊易べしと仰ひよとある  
臣ハ不識有し一事小やとあり

愛むと為臣固に  
王之忍び不ぞ知  
王の曰く然誠  
百姓する者有齊  
國褊小と雖ども  
吾何ぞ一牛と愛  
まん即ち其殺  
鯨とて罪無し  
て死地と就が如く  
かろに忍び不故  
ゆへ羊を以て  
之易  
曰く王百姓之王  
以て愛むと為と  
異しむと無小を  
以て大易彼惡  
くんと之を知らん

為愛也臣固知王之不忍也  
王の曰くいふも之事有し孟子の曰く即ち是心こそ右の王  
たんと徳とハヤセ扱この時御下の百姓ども申合るハ王ハ物を愛  
めんと見ると牛ハ弊多く羊ハ價とくると故とあり然ども臣ハ  
固より王の仁心忍びざる一を推せざる

王曰然誠有百姓者齊國雖褊小吾  
何愛一牛即不忍其殺鯨若無罪而就  
死地故以羊易之也  
王これを聞のハ実ふも然  
なり誠は百姓といふ者ハ小  
いなるたと齊の國褊小とも一の牛の愛さるるなりその殺鯨とん

曰王無異於百姓之以王為愛也以小  
易大彼惡知之王若隱其無罪而就死



王若其罪無一  
て死地に就と隠  
まば則ち牛羊何  
ぞ擇ぶ

王笑て曰く是誠  
何の心ぞ哉我  
其財を愛んで  
之易ふ小羊と  
以てまらに非ど  
宜なる乎百姓之  
我を愛むと謂

曰く傷と無是乃  
仁の術さう牛と  
見て未だ羊と見  
未君子之禽獸に  
於其生と見て

其死を見忍び  
不其聲を聞て  
其肉を食するに  
忍び不是と以て  
君子ハ庖厨と遠  
ざる也  
王説んで曰く詩  
小云く他人心有  
予之を付度と  
夫子之謂也夫  
我乃ハ之を行ひ  
反て之を求めて  
吾心は得不得夫  
之を言我心は於  
臧臧焉と有  
此心之王は合所  
の者ハ何ぞ

地則牛羊何擇焉  
あつて孟子の難問を申す事ハかく別  
右百姓の申す事ハかく別  
無理とハ異なりれど如何とたれば王の仁なるにあらざるは羊  
とて生ある者なり大なると小なるをせめて何れハ擇ぶや

王笑曰是誠何心哉我非愛其財而易  
之以羊也宜乎百姓之謂我愛也  
王の難問をさう難儀におぼしめて曰く夫もまら理は當り  
誠は寡人何の心ぞ其時牛を憐れらるる乎今先生の論を  
さして吾も又吾心をあつた然ども財を愛する事ハあつた  
又實は百姓の評すも宜なりと孟子の難問遂は工夫なり  
我らるるをい

見羊也君子之於禽獸也見其生不忍  
見其死聞其聲不忍食其肉是以君  
子遠庖厨也  
孟子かこみて王の心を説きみて曰く  
百姓のヤセ一言と傷小忍ひのみなら  
是乃仁の術とつありのこ其子細ハ人の心ハ靈なるものこ聖賢  
ハ明り小常人ハ物に敵する人とも五常を備へるものゆゑ今日小  
敵を以て視る耳は殺しつゝ人を殺して此心おこさる羊ハその場  
不有を以てなり君子の心ハ是らふらふり食する物ハ遊  
時を懸る魚又ハ声を聞覺る禽獸の肉ハ食するに忍び或ハ  
畜養して生てゆたかき物ハその死する時の泣きを憐れむを  
惟は是は君子ハ庖厨を  
遠ざかるの事ありと

王説曰詩云他人有  
心予付度之夫子之謂也夫我乃行之  
反而求之不得吾心夫子言之於我心  
有臧臧焉此心之所以合於王者何  
也  
王又孟子の説のみを聞て説き曰く誠は詩經小の詞こそ  
あつて譬へば詩は他人心は思と有とこの方よりそのこ



曰く王は復を者  
有ん曰く吾力  
以て百鈞を擧る  
不足而して以て  
一羽を擧るに足  
不明は以て秋毫  
之末を察し不足  
而して輿薪を見  
許さん乎

今恩以て禽獸  
及不足而して功  
姓は至不者ハ獨  
何と輿然らバ則  
ハ一羽之擧ら不  
力と用不が為る

輿薪之見不明  
用ひ不が為る百  
姓之保んせ見不ハ  
恩を用ひ不が為  
る故ゆへ王  
王不ハ為不也  
能ハ不非ざる也

曰く為不者と能  
不者與之形何  
を以て異る曰く  
泰山を挾んで以て  
北海を越へ人  
語て曰く我能  
と是誠不能也  
長者の為一技を  
折人の語て曰く

内を推付て度知の詞あり夫子の今の謂これならぬ我今こが  
身小行ひて心は悟得を却て夫子の方より我心の程を言明せり  
心深く威を焉扱す此心が  
王者の道は合とハ何也  
曰有復於王者曰吾力

足以擧百鈞而不足  
以擧一羽明足以  
察秋毫之末而不見輿薪則王許之乎

孟子の曰く即ち其心を廣く用とバ王者の大仁なり用とバハ  
牛羊を思の小愛なりたとバ一人の力者あるんはその力者復ハ  
吾力にて百鈞の重ハ輕く鳥の羽一羽ハあがらばといふ又一人ハ吾  
眼の明らるとハ秋の中半獸の毫の末の細くなるをいふ輿  
小積一薪ハ目にからばといふニフまがら王ハ右と許容あるや  
いふ○三十斤の重を一鈞といふ

曰否王の曰く否  
今恩足以及禽獸而功不

至於百姓者獨何與然則一羽之不擧

為不用力焉輿薪之不見為不用明焉

百姓之不見保為不用恩焉故王之不

王不為也非不能也

政の功もハ獨何とぞや右のたとへて謂ハ羽の擧ぬといハカ用  
ざるなり薪の見ぬといふも明とと為ざるなり今陛下の百姓

曰不為者與不能者之形何  
を以て異る曰く

以異曰挾泰山以超北海語人曰我不

能是誠不能也為長者折枝語人曰

我不能是不為也非不能也故王之不



我能ハ不ト是為  
不也能ハ不ト非  
也故ハ王之王之  
王不ハ泰山を  
挾んで以て北海と  
超る之類ト非  
也王之王不ハ  
是枝を折之類  
也

吾老を老として  
以て人之老小及  
吾幼を幼として  
以て人之幼及  
天下と掌と  
運らま可  
詩云く寡妻  
刑と兄弟に

至以て家邦を  
御と云言とろハ  
斯心を擧て諸と  
彼加る已故ハ  
恩を推セバ以て  
四海を保らる足  
妻子を保らる  
無古ハ之人大  
過ト所以の者ハ  
他并善其為所  
推已今恩以て禽  
獸及小足而  
功百姓ト至不者ハ  
獨何と與  
權にして然して後  
小輕重と知度に

王非挾泰山以超北海之類也王之不  
王是折枝之類也  
王又曰く恩を用て寡人が不為  
不為と不能と理の異なるを以て示さる  
人は魯國の泰山を脇下に挾て北の海をこび超るといふ人  
不能といふハ誠は能ざるなり又長者のさ  
枝を折来べといふ人其人能ごと語ハ本より不能とならむ  
是為さるは是故今王の王道の仁政もろろを用ざる長者  
のさるは枝を折るの類なり

老吾老以及人之老幼吾幼以及人之幼  
天下可運於掌  
心を推廣といふハ君となりて上  
父兄の老と敬のバ下々も其父兄不事  
上する人吾子弟の幼を慈愛のバ下又こそ小見らひて子弟  
の幼を慈愛ひこれと及まといふハ  
天下と治るの易きと掌上の物を運が如しとなり

詩云刑于  
寡妻至于兄弟以御于家邦言擧斯心  
加諸彼而已故推恩足以保四海不推  
恩無以保妻子古之人所以大過人者  
無他焉善推其所為而已矣今恩足以  
及禽獸而功不至於百姓者獨何與

詩經の詞は家の内より刑法を立先ツ徳も  
化して兄弟に睦く夫より推及て社家邦廣く御し治る  
なりとあり此詩の心も他より子を慈愛する此心を奉て  
彼民に推育を加ふのなり外不故なり恩を推及セバ四海  
保らるなり推及されバ妻子兄弟をも保か古の人は聖賢  
はハ大徳の小人過るやうにハ他のりしてハ  
推及とまでなく今王の恩心  
權然後知輕重度  
獸及て百姓小及ばらハ何ぞぞ



然則後長短物皆然心為甚王請度  
抑王甲兵與士臣之危怨諸侯然後心與  
王曰不吾何快也  
將以五口大欲求之  
王笑言不可得與

然後知長短物皆然心為甚王請度  
之何物小者輕者重者短者長者  
抑王與甲兵危士臣構怨於諸侯然後  
快於心與  
王曰否吾何快於是將以求吾所大  
欲也  
曰王之所大欲可得聞與王笑而不  
言

曰為肥甘不足於口與輕煖不足於體  
不為與輕煖之體  
小足不與抑米  
色之目小視不足  
為與聲音之耳  
小聽不足不與便  
辟女之則使令  
小足不與王之諸臣  
皆以之供  
足王豈是為  
吾是為為不

曰為肥甘不足於口與輕煖不足於體  
與抑為采色不足視於目與聲音不足  
聽於耳與便嬖不足使令於前與王之  
諸臣皆足以供之而王豈為是哉曰否  
吾不為是也  
曰然則王之所大欲可知已欲辟土地

孟子

五十一、 正線集 官藏



楚を朝し中國を益し而して四夷を撫んと欲する若く為所を以て若く欲する所を求むハ木は縁て魚を求むる猶一王の曰く是の若くハ其甚と云ふと馬與曰く殆んと馬よ其甚と云ふと有木は縁て魚を求むるハ魚を得ず雖も後の災い無若く為所を以て若く欲する所を求むるハ心力を盡し

朝秦楚益中國而撫四夷也以若所為求若所欲猶緣木而求魚也

孟子曰く王の欲する所の右の品は是なりと云ふ然るに其大小欲する物推察して極て土地を廣く取辟り秦楚の兩大國を従て來朝せしめ中國を益して四方の夷を撫保せんとの事なり然るに今迄さへも若の如く兵を興し怨を結んでさうと欲せし若の如く百姓を苦しむ事なれば利運を得とも思はざるはた地上の木は取付居て水中の魚を求むる事なり王曰く若是其甚與曰殆有甚焉緣木求魚雖不得魚無後災以若所為求若所欲盡心力而為之後必有災

而して之を為後必らざる災い有人曰く聞て得可與曰く鄒人と楚人と戰つ則ち王以て孰も勝んと為曰く楚人勝ん曰く然らば則ち小固より大固より以て大は敵を可く不寡ハ固より以て衆小敵を可く不弱ハ固より以て彊に敵と可く不海内之地方千里ある者九つ齊集して其一つを有一を以て八つ

若の如く欲する所を無理に求むるハ心力を盡してそのうちハ身を引出さるべし曰可得聞與人勝曰然則小固不可以敵大寡固不可以敵衆弱固不可以敵彊海内之地方千里者九齊集有其一以服八何以異於鄒敵楚哉蓋亦反其本矣

王の曰く吾欲する所の土地を求んとては是を以ては認りて之を得べしや孟子の曰く試は度ぬ若し鄒の邑中の人と楚の大國の人数と戦ふ孰も勝や王の曰く勿論楚人勝なり孟子の曰く然るに其理を以て見れば小を以て大は敵は寡弱衆強に敵對なれば今海内の中千里四方の國九つあり今王齊の國の如くを以て九つの一分と有るはさう然るに九つの力を以て八つの



服之何を以て鄒

の楚と敵とる小

異なりん哉蓋し

亦其本小反也

今王政とて舜仁

と施さば天下の仕

者ハ皆王之朝小

立と欲し耕と

者ハ皆王之野小

耕とて欲し商

賈ハ皆王之市小

蔵とて欲し

行旅ハ皆王之塗

出入とて欲し

天下之其君と疾ん

と欲する者皆王と

赴愬するを欲せ使ひ

敵國を帰服せしむるとハ鄒と楚の如くも危くもや蓋し前

今王發政施仁使天下仕者皆欲立於

王之朝耕者皆欲耕於王之野商賈皆

欲藏於王之市行旅皆欲出於王之塗

天下之欲疾其君者皆欲赴愬於王其

若是孰能禦之今王の政道を舜仁と施

朝廷は立とて欲しく農民ハ王の田野を耕し商賈ハ王の市中

小身を蔵又行旅ハ王の御領の塗は出かの心むくむく

天下の内悪君ありて百姓恨むるハ皆王小来赴て愬

如是はたうてハ王の人数を禦ごむる敵ハあり

王曰吾惛不能進於是矣願夫子輔

吾志明以教我我雖不敏請嘗試之

王の曰く吾今追智惛して道に進むとなく今王の吾願

何とて夫子も吾志を輔て明く小教め嘗て行らん

曰無恆産而有恆心者惟士爲能若民

則無恆産因無恆心苟無恆心放辟邪

侈無不爲已及陷於罪然後從而刑之

是罔民也焉有仁人在位罔民而可

爲也孟子の曰くすべて世の能治るハ万民の産業恆小

ありたがひハあせとも貧を侈苦羨なる四つのまぐるまて

義理の心たう然るに恒の産之くても恆小義理の心有との

者ハ惟操節ある士の能爲くも有べし通用の民情ハ大く

夫子

其是の若人ハ孰り

能之を禦る

王の曰く吾惛

て是に進むと能

ハ不願くハ吾志

と輔け明らふ小

以て我を教よ我

不敏やうと雖も

請嘗て之と試ん

曰く恒の産無

て恒の心有者ハ惟

士能とて爲民の若

く則ハ恒の産

無くバ因て恒の心

無苟ハ恒の心無

ハ放辟邪侈爲不

無已罪ハ陷つるに







其時と失わたりて無  
七十の者以て肉を食  
と可百畝之田其時と  
奪と勿八口之家以  
て飢と無可庠  
序之教を謹し  
之を申さ小孝悌之  
義を以てて頌白の  
者道路に負戴せ  
不老者帛を衣肉を  
食黎民飢不寒  
不然而王と不者  
未之有未也  
梁惠王章句下  
莊暴孟子小見て  
曰暴王と見王  
暴に語と樂と好と

悌之義頌白者不負戴於道路矣老  
者衣帛食肉黎民不飢不寒然而不  
王者未之有也  
この段已に惠王の説のひ一王政の法  
たる八口と右田地の制法上の農夫ハ  
九人の口養ハ中ハ八人下ハ七人なり  
王政仁政といふ不忍と  
りこころを臣一晉く捕及といふの外なり

### 梁惠王章句下

莊暴見孟子曰暴見於王王語暴以好  
樂暴未有以對也曰好樂何如孟子曰  
王之好樂甚則齊國其庶幾乎

莊暴ハ齊の臣下なり孟子に見て曰くこのころ王の物ぐり  
我音樂を好とのめり暴いまで對やと好と可不可

以て暴未以て對  
と有未曰樂と好  
と何如孟子對曰  
王の樂と好と甚  
く齊國其庶幾乎  
他日王を見曰く王  
嘗て莊子小語  
樂を好むと以て  
有諸王色と寡ト  
て曰く寡人能先  
王之樂と好む非  
直ち小世俗之樂と  
好む耳  
曰く王之樂と好む  
甚しくバ則ち齊ハ  
其庶幾乎今之樂  
ハ古之樂の猶

他日見於王曰王嘗語莊子以好樂有  
諸王變乎色曰寡人非能好先王之樂  
也直好世俗之樂耳  
いへん孟子對のよてそれハ日出度となく若王好の事甚し  
齊の國ハ盛なるとと瑞相と庶幾となく  
曰王の好樂甚則齊其庶幾乎今之  
樂猶古之樂也  
孟子さつと對のよハ是不可ハ  
非と樂を好むといふことハ甚  
々バ王の國ハ繁昌の時庶幾  
ともその好むの理は於てハ同ト  
曰可得聞與曰獨樂樂與人樂樂孰



曰く聞くと得可與  
曰く獨樂して樂  
むと人與樂して樂  
むと孰と樂して  
曰く人と與ふと  
若く少く與樂して  
樂してと衆與樂  
して樂してと孰  
樂してと曰く衆  
樂してと若く不臣請  
王の爲は衆と言ん  
今王此は鼓樂を  
百姓王の鐘鼓之聲  
管籥之音を聞  
舉首を疾し頰を  
感足而して相告  
曰く吾王の鼓樂と

樂曰不若與人曰與少樂樂與衆樂  
樂孰樂曰不若與衆臣請爲王言  
樂王これを聞て喜て曰く其理聞可得や孟子も曰く誠  
樂の人の意旨は如何にや獨の時と相手の人ありと何と樂  
のさ又火の人と衆多の人とつらさのさや王の曰くこれ  
獨より相手ありて且衆多るるに不知とさよ依て孟子説の  
小ハ然バ王の爲は衆の  
由来を述べるとなり今王鼓樂於此百姓聞  
王鐘鼓之聲管籥之音舉疾首蹙  
頰而相告曰吾王之好鼓樂夫何使我  
至於此極也父子不相見兄弟妻子離  
散今王田獵於此百姓聞王車馬之音

好む夫何ぞ我と此  
極に至ら使父子相  
見不兄弟妻子離  
散今王此は田獵  
を百姓王の車  
馬之音を聞羽旄  
之美をに見舉首と  
疾し頰を蹙而  
て相告て曰く吾王  
之田獵を好む夫何  
ぞ我と此極に至  
ら使父子相見不  
兄弟妻子離散  
此他無民與樂  
今王此は鼓樂を  
百姓王の鐘鼓之

見羽旄之美舉疾首蹙頰而相告曰  
吾王之好田獵夫何使我至於此極也  
父子不相見兄弟妻子離散此無他不  
與民同樂也今王音樂をか御下の百姓とし  
鐘鼓管籥の音を聞て何と厭て皆  
頰を眉を蹙て奇相告は何故よれくと困窮極て鼓樂を  
樂するの事やと或ハ王の田獵かこの時ハ百姓と車馬の音  
を聞羽旄の義をいさを見さ付し舉頰は眉を蹙て又右の  
曰く由如何にや下々ハ軍務公用とて命を失ふ  
稅斂に困めらる父子相見ても兄弟妻子離散るれば  
今王ハ音樂田獵の樂ハあはれ下を恤あはれ事なく  
與同とせらる今王鼓樂於此百姓聞王鐘鼓  
之聲管籥之音舉欣欣然有喜色而



鼓管箏之音を  
聞舉欣欣然  
て喜色有而  
相告て曰く吾王  
庶幾ハ疾病無  
何を以て能鼓樂  
と今王此田獵  
人百姓王の車馬  
之音を聞羽旄之  
美と見舉欣欣然  
とて喜色有而  
相告て曰く吾王  
庶幾ハ疾病無  
を以て能田獵  
此他無民與樂  
同らふ今王百姓  
與樂を同らふ

相告曰吾王庶幾無疾病與何以能鼓  
樂也今王田獵於此百姓聞王車馬之  
音見羽旄之美舉欣欣然有喜色而相  
告曰吾王庶幾無疾病與何以能田獵  
也此無他與民同樂也今王與百姓同  
樂則王矣  
民と憂樂を與する時ハ民も又上を戴く  
とて喜色有る也  
鐘管箏の音を聞ても舉も欣欣然喜の色顔も出て相告る  
小も吾王の徳さハ願ハ永く君とたう  
在りて音樂をなす  
車馬の音羽旄の義々布を見ふ付ても右せし申合なる  
これ他の義たり民と憂樂を與は仕ふべからず今王も一  
の私といふ事を去て周と仁の道といふ心を留め則天下王

則ハ王  
齊の宣王問て曰く  
文王之圃ハ方七十里  
有諸孟子對て  
曰く傳は於て之有  
曰く是の若く其大  
かる乎曰く民猶  
以て小なりと為  
曰く寡人之圃ハ方  
四十里民猶以て大  
なりと為ハ何と曰く  
文王之圃ハ方七十里  
芻蕘の者往雉兔  
の者往民與之  
同らふと民以て小  
ならずと為亦宜ら  
不乎

○齊宣王問曰文王之圃方七十里有  
諸孟子對曰於傳有之  
宣王の問ハ聖人文王  
の圃方七十里四方と承  
傳は於て之有  
宣王又曰くいふや孟子の曰く  
曰若是其大乎曰  
民猶以為小也  
宣王又曰くいふや孟子の曰く  
曰寡人之圃方四十里民猶以為  
大何也曰文王之圃方七十里芻蕘者  
往焉雉兔者往焉與民同之民以為小  
不亦宜乎  
王の曰く寡人の圃ハ四十里なるに民百姓  
と大なるやハ如何なる道理ぞ孟子の  
曰くこれ文王の圃ハ禁制となく其内へ芻蕘の者も雉兔も  
同くこの内へ入るる民と與はるるを以て害なく然ハ民の



臣始境至國之大禁之同然然後入臣聞郊關之內有囿方四十里殺其麋鹿者如殺人之罪則是方四十里為阱於國中民以為大不亦宜乎

臣始至於境問國之大禁然後入臣聞郊關之內有囿方四十里殺其麋鹿者如殺人之罪則是方四十里為阱於國中民以為大不亦宜乎

齊宣王問曰交隣國有道乎孟子對曰有惟仁者為能以大事小是故湯事葛文王事昆夷惟智者為能以小事大故大王事獯鬻句踐事吳

湯葛之事文王昆夷之事惟智者小事大以大事小者天也樂天者保天下保其國者保其

大故大王事獯鬻句踐事吳

齊之宣王の問に答ふるに鄰國の交をなさんと小道ありや無く盛に乗て吾國を窺ひ甚む難義ありと孟子對ひて古と見ふその類をありし仁者ハより大國を以て小國は事なす事葛といふ夷は事周の文王ハ昆夷といふ夷は事越王句踐ハ吳王大は事とたり周の大王ハ獯鬻といふ夷は事越王句踐ハ吳王は事とたり湯王大王の事ハ後とたり

以大事小者樂天者也以小事大者畏天者也樂天者保天下畏天者保其國



詩云云々天之威を畏る時于之を保

王の曰く大なる哉言寡人疾有寡人勇と好

對曰曰く王請小勇と好むて無と夫劍を撫て疾と

詩云云く王赫と一して斯と怒爰と

詩云畏天之威于時保之

王曰大哉言矣寡人有疾寡人好勇

對曰王請無好小勇夫撫劍疾視曰彼

惡敢當我哉此匹夫之勇敵一人者也

王請大之

詩云王赫斯怒爰整

其旅以退徂莒以篤周祜以對于天

下此文王之勇也文王一怒而安天下

之民

書曰天降下民作之君作之師

惟曰其助上帝寵之四方有罪無罪惟

我在天下曷敢有越厥志一人衡行於天下

武王恥之此武王之勇也而武王亦一

怒而安天下之民

其旅を敷のへて徂莒を以て周祜を以て天下一つ此文王之勇也文王一怒而安天下之民と安んを



也而して武王も亦一怒して天下之民と安んず

今王も亦一怒して天下之民と安んず  
人せよ民惟恐くハ王之勇と好んとす  
齊の宣王孟子小  
雪宮小見王の曰く  
賢者も亦此樂と  
有乎孟子對て曰く  
有人得れば則ち  
其の上を非とす

得なくて而して其上を非とする者  
非也民の上を為して  
民與樂すと同  
也  
民之樂と樂  
者ハ民も亦其樂  
を樂む民之  
憂と憂む者ハ民  
亦其憂と憂樂  
む小天下を以て  
憂むに天下を  
以て然して王  
不者ハ未だ之有未

りのと生降のめてこの世界あり然天子かぐや奉りして  
万民の君となりしや師匠となりて善要を正し教の理  
曰惟上天とて天の神祇助奉りて四海四方を籠るといふもの  
罪有れば罪毎ものハ賞義をたうんこの事これ己小あふ誰  
その志の外をの越て悪業となる者ハ有まじ衡は行とハ我  
まに行をなまむものといふ一人もかく振ふるものあれば武王  
とつらう恥して我徳の不足なる故と思ひのみ誠志ありあつく  
勇氣をもつらう武王も又一怒のめて遂に天下を治ののみ

今王亦一怒而安天下之民民惟恐王之不好勇也  
今王よも文王武王のどく仁を以て民を懐く一怒とて天下の万民を保つ

○齊宣王見孟子於雪宮王曰賢者亦有此樂乎孟子對曰有人不得則非其上矣不得而非其上者非也為民上不與民同樂者亦非也  
雪宮とハ宣王の下  
孟子對て曰く九を鄙とす心ハ主の樂ありて己が身樂む事と得ざる毎も上主君を怨非ものなり樂と己が身得ざるして上を非ハ甚非なりすこ万民の上とる者一人の樂のこして人と樂とを為さるも非なり

上矣不得而非其上者非也為民上不與民同樂者亦非也  
雪宮とハ宣王の下  
孟子對て曰く九を鄙とす心ハ主の樂ありて己が身樂む事と得ざる毎も上主君を怨非ものなり樂と己が身得ざるして上を非ハ甚非なりすこ万民の上とる者一人の樂のこして人と樂とを為さるも非なり

樂民之樂者民亦樂其樂  
憂民之憂者民亦憂其憂樂以天下憂以天下然而不王者未之有也

君さる者ハ或ハ年柄よく下々悦び樂むとてハ君も亦樂む事  
とハ民の憂あるとてハ君も亦憂むものなり民の上の  
喜山を悦び悔といふやうななりて君臣一致して天下安穩なり  
かやうにして王者といふとさる者ハ昔より未之ありとたり



昔齊の景公晏子  
問て曰く吾轉附  
朝舞を觀海を導  
つて而して南  
琅邪小放く欲を  
吾何を脩て以て  
先王の觀比を可  
晏子對て曰く善  
哉問天子諸侯  
適を巡狩と曰く  
狩守る所を巡  
諸侯天子に  
朝するを述職と曰  
述職職とる所  
と述る也事非  
る者無春ハ耕  
を省て足不補

昔者齊景公問於晏子曰吾欲觀於轉  
附朝舞導海而南放于琅邪吾何脩  
而可以比於先王觀也昔者景公政道志ざり  
を發ぬ大夫晏子問て  
曰く吾國中を巡見して轉附山朝舞の山を觀んと欲なり  
それより海上を經て琅邪の邑何仕置を脩て昔の聖王  
王の觀行し肩を  
晏子對曰善哉問也天子適  
諸侯曰巡狩巡狩者巡所守也諸侯朝  
於天子曰述職述職者述所職也無非  
事者春省耕而補不足秋省斂而助不  
給夏諺曰吾王不遊吾何以休吾王不

秋ハ斂ると省  
給不を助く夏の  
諺ハ曰く吾王  
遊ババ吾何を以  
て休ん吾王豫ま不  
ハ吾何を以て助  
ん一遊一豫諸侯の  
度と為

豫吾何以助一遊一豫為諸侯度  
晏子も賢人の稱ある人なり對て曰く誠は善哉王の志ざり夫  
いふ一ハ大徳あるの天子ハ諸侯の狩とる所の領地を巡のは是を  
巡狩といふ諸侯ハ年々天子へ來朝して各の務る職を述り上る  
是を述職といふなりと天下政道の事は非ざるハ春ハ民の  
耕むるを省て秋ハ省て斂る時給めしを助るなり夫れ  
補ひ秋ハ年貢と斂る時給めしを助るなり夫れ  
古ハ夏といふ代の諺辞ハ吾王の遊見の御遊なくハ吾等  
何を以て休息せん吾王の遊見を豫とるハ吾等何ぞ生  
命を助るんといふ傳りかくの如く昔の帝王の御心ハてびの  
遊びといふの豫とるハ民の為に國々諸侯の度とならん  
者なり  
今也不然師行而糧食飢者弗食  
勞者弗息賄賂胥讒民乃作慝方命  
虐民飲食若流流連荒亡為諸侯憂







曰く夫明堂ハ王者之堂也王政を行はざるを欲せば則ち之を毀す勿

王の曰く王政得可與對て岐と治し耕者九一仕者祿を世と不澤梁林示征セ不澤梁林示無人と罪をらむ無子と不孝と妻無と鰥と曰老て夫無と寡と曰老て子無と獨と

曰幼にして父無を孤と曰此四の者天下之窮民にして而して告る者無者なり文王政を施すに先斯四の者先を詩云可乎富人哀一此獨

諸已乎孟子對曰夫明堂者王者之堂也王欲行王政則勿毀之矣

我領分ある明堂を建廢小なるを益なき毀すといふものあり毀すやまざるの事已ざるやとの問なり明堂といふ泰山の麓に在り周の天子東へ巡見の時諸侯が會合し伺ふ來りしところなり則ち政を行の処なり孟子對のありハ王と先王仁政を行ひ王曰王

政可得聞與對曰昔者文王之治岐也耕者九一仕者世祿關市譏而不征澤梁無禁罪人不孥老而無妻曰鰥老而無夫曰寡老而無子曰獨幼而無父曰

孤此四者天下之窮民而無告者文王

發政施仁必先斯四者詩云可乎富人

哀此榮獨王道の政法ハいづと王の問ナリ孟子對て曰く文王の岐州を治るハ法ハ里四方を

一井と名づけりて田地を界を建九ツに分て八分ハ百姓に下二一分ハ上へ是を九一といふ仕官の面々扶持を代々を官の器量を撰て任ぜりて市場の關ハ狼藉宣嘩の譏りて今此如く征稅の爲にありて泥梁の獵ハ禁ずる

下々の産下々を罪人を殺り當人のふて女子を殺す下々の産下々を四品の困窮人を惠む老人の妻たる者老女の夫たる者年よりして子なき者如少して父母あるもの

づも養ひの術なき困窮人なりこの鰥寡孤獨の四ツハ告訢するものなり文王の仁政は是を差す救ひありたり詩經にも人の身の上を詠して可矣富人獨身と云ふ此榮也王曰善哉言乎曰王如







を好む百姓與之を  
同ぢふま王とらふ  
於て何う有ん  
孟子齊の宣王  
謂て曰く王之臣  
其妻子を其友  
に託して而して  
楚之て遊者有  
其反比則ハ其妻  
子と凍餒をハ則  
之を如何王の曰  
之を棄

曰く士師士を治  
ると能ハば則ち  
之を如何王の曰  
之已ん

曰く四境之内治  
不ハば則ち之を如何  
王左右を顧みて  
他を言  
孟子齊の宣王  
見曰く謂所故國  
者喬木有を謂  
と謂ハ非世臣  
有を謂也王に親  
臣無音者進む  
所今日ハ其亡を  
知不

攻来を逃去うつこと詠  
くやく馬を走て西水の滸  
宮中の宇を晉の  
故は年長るまを曠く  
なく不義いづつと  
百姓に及し萬民  
○孟子謂齊宣王曰王之臣有託其妻  
子於其友而之楚遊者比其反也則凍  
餒其妻子則如之何王曰棄之

孟子曰く日宣王物語  
を託て楚國へ遊居  
養をなすて餓凍  
御仕置かるれんや  
則如之何王曰已之  
正治

王の曰くそまハ官と  
曰四境之内不治則如之  
何王顧左右而言他  
孟子右の向を設  
今御領分四方の境の内  
浴く悪ととれハ誰か暗  
をひて對ぢて左右の人  
過を聞ハ改じべと小徳  
諸侯多くこの例なり

○孟子見齊宣王曰所謂故國者非  
謂有喬木之謂也有世臣之謂也王  
無親臣矣昔者所進今日不知其亡  
也  
故を家族又ハ故國  
尊をけハ喬木石  
大臣家あるを以て謂  
或ハ昔者より王の側  
者ありと思ふらに早  
今日ハ有亡を不知  
三十一 玉藻集



王曰吾何以識其不才而舍之

王の曰くその義吾力に及ばざるを以て始より不才といふを識して舍めんとつづきの定まりありや

曰國君進賢如不得已將使卑踰尊疏

踰戚可不慎與

孟子の言ふハ君を尊ぶる者國を治めんと思はるる只賢人を進め引

ハ至て大抵之輕くする義あり如何となれば卑者を尊貴

者の上へ挙交の疏なる者親戚なる者の上へ左右皆曰

賢未可也諸大夫皆曰賢未可也國人

皆曰賢然後察之見賢焉然後用之

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

勿聽國人皆曰不可然後察之見不可

焉然後去之

賢人を引挙て國を治といふハ万民の

王の左右扈從の者ハ小の賢者なり有徳の人なりと

曰くも未可といふは諸の大夫臣下の者もつゞく賢者なりと

いふ然も猶未可といふは國中の民百姓のつゞくこと

賢者なり難有人なり上より立置ると曰ハ然後より

察し多て誠小賢徳の人小極と見とけ左右皆曰

可殺勿聽國人皆曰可殺然後察之見

の曰く吾何ぞ以て其不才を識して之を舍  
曰國君賢を進むるに己ことを得るに如し將に卑を尊ぶるに踰疏を戚し小踰使んと將慎しま不可けん與  
左右皆賢と曰く未可也諸大夫皆賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也  
賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也  
賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也  
賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也

用の左右皆不可  
曰く未可也諸大夫皆不可と曰く未可也國人皆不可と曰く未可也  
賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也  
賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也  
賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也  
賢と曰く未可也國人皆賢と曰く未可也







孟子見齊宣王宣王曰為臣室則必使工師求大木工師得大木則王喜以為能勝其任也匠人斲而小之則王怒以為不勝其任矣夫人幼而學之壯而欲行之王曰姑舍女所學而從我則何如

孟子見齊宣王宣王曰為臣室則必使工師求大木工師得大木則王喜以為能勝其任也匠人斲而小之則王怒以為不勝其任矣夫人幼而學之壯而欲行之王曰姑舍女所學而從我則何如

今璞玉此有萬鎰雖必使玉人彫琢而後用之則何如曰姑舍女所學而從我則何如

今有璞玉於此雖萬鎰必使玉人彫琢之至於治國家則曰姑舍女所學而從我則何以異於教玉人彫琢玉哉

○齊人伐燕勝之宣王問曰或謂寡人勿取或謂寡人取之以萬乘之國伐



之を取謂萬  
乘之國と以て萬  
乘之國を伐五  
旬して而して  
之を取人カ此  
に至ら不取不  
必天の殃い有  
之を取と何如  
孟子對て曰く之  
を取て而して燕  
の民悦びる則ハ  
之を取古之人  
之を行わん者有  
武王是也之を取  
て而して燕の民  
悦び不則ら取  
と勿古之人

萬乘之國五旬而舉之人力不至於此  
不取必有天殃取之何如  
王の曰くこの度  
いくさ勝利なり  
孟子對曰  
孟子對て曰く之  
を取て而して燕  
の民悦びる則ハ  
之を取古之人  
之を行わん者有  
武王是也之を取  
て而して燕の民  
悦び不則ら取  
と勿古之人  
取之而燕民悦則取之古之人有行之  
者武王是也取之而燕民不悦則勿取  
古之人有行之者文王是也  
孟子對て曰く之  
を取て而して燕  
の民悦びる則ハ  
之を取古之人  
之を行わん者有  
武王是也之を取  
て而して燕の民  
悦び不則ら取  
と勿古之人

之を行わん者有  
文王是也  
萬乘之國を以て  
萬乘之國を伐  
簞食壺漿以て  
王の師を迎豈  
他有哉水火を  
避と也水の益  
深が如く火の益  
熱が如く亦運  
齊人燕を伐て  
之を取諸侯將  
謀て燕を救  
んと將宣王の  
曰く諸侯寡人  
伐を謀者多し

取て古の明君  
以萬乘之國伐萬乘之國  
簞食壺漿以迎王師豈有他哉避水火  
也如水益深如火益熱亦運而已  
萬乘の國相ともに合戦かゝのてと乱を女をのハあり然王の  
出馬を願ひ帰服してあるも食を簞の行厨に入漿を壺に入れて  
王の諸軍勢を地へ喜ぶものハ他有哉た今迄の政道の水火の難  
よりも苦さを避くこととならざるや若君の欲心起バ水の益  
深が如く火の益熱が如く理りて他の敵國より攻来べ  
たとハ水火の盛りて運来らんこと已矣  
○齊人伐燕取之諸侯將謀救燕宣王  
曰諸侯多謀伐寡人者何以待之  
右引續て遂に燕の國を押し領ありたをハ他の諸侯さつと惡  
て齊を討て燕を救んと謀り宣王ふりく恐を何以して



何を以て之を待

孟子對曰臣聞七十

里為政

也

未聞以千里畏人者

也

對曰昔殷の湯王六

書曰湯一征自

葛始夫天下信之東

面而征西夷怨南面

而征北狄怨曰奚為

後我民望之若大

早之望雲霓也歸市

者不止耕者不變

誅其君而弔其民若

時雨降民大悅

書曰後我后

後來其蘇

孟子對曰臣聞七十

里為政

也

未聞以千里畏人者

也

對曰昔殷の湯王六

書曰湯一征自

葛始夫天下信之東

面而征西夷怨南面

而征北狄怨曰奚為

後我民望之若大

早之望雲霓也歸市

者不止耕者不變

誅其君而弔其民若

時雨降民大悅

書曰後我后

後來其蘇

今燕虐其民

王往而征之民以為

將拯已於水火之中



累其宗廟を毀ら其重器を遷る其可なりん天  
下固より齊の疆を畏る今又地を倍して而して仁  
政を行ふハ不是天下之兵を動か  
王速ふ小令を出  
其旄倪を反し  
其重器を止し燕  
の衆は謀り君を  
置而して後よ  
去らば則ち  
猶止し及可

如之何其可也天下固畏齊之疆也  
今又倍地而不行仁政是動天下之兵  
也  
今度燕の君その民を虐む王往て征伐する時民の爲  
然若その國民の父兄弟を係累又八國守大夫の宗廟を  
毀て重器を奪遷ハ如何小可也や天下固より齊ハ強國なれば何  
ぞハ軍来べしと恐居所今又土地大かかくて仁義を用ふれば  
いよいよ危くして自然と天下の人氣動して安からず  
王速出令反其旄倪止其重器謀於燕  
衆置君而後去之則猶可及止也  
王速く出令命さる有て係累旄倪を燕へ送ら反し  
重器物をえへ止置るもの燕の衆人と相謀りて國守を定め  
さやうありて後燕を去らばその一大事の起る始め燕の合戦と  
止らば一位置及べしと可なり

鄒魯與関  
穆公問曰吾  
有司死者者  
三十三人而  
民莫之死也  
誅之則不可  
誅之則疾視  
其長上之死  
而不之如何  
則其可なりん  
孟子對曰凶  
年飢歲君之  
民老弱轉乎  
溝壑壯者散  
而四方者幾  
千人之倉廩  
實府庫充有  
司莫以告

○鄒魯與関穆公問曰吾有司死者  
三十三人而民莫之死也誅之則不可  
勝誅不誅則疾視其長上之死而不  
救如之何則可也  
小吾有司たる者討死三十三人あり然し軍卒并小五國の民  
一人も見ざる討死もせざるよしふしとさかたり之を正して  
下々と誅せんと思れば幾人と等勝を扱捨るべきの後長上の  
死をも疾視せしめて救ざるべし如何して可んや  
孟子對曰凶年飢歲君之民老弱轉乎  
溝壑壯者散而之四方者幾千人矣而  
君之倉廩實府庫充有司莫以告







則いかに可かしく孟子  
子對て曰く昔者  
大王邠は居狄人之  
を侵を去て岐山  
之下に之て居擇  
之を取ら非  
已とと得不得也  
苟善ことを為後  
世子孫必も王者  
有ん君子業を  
創統を垂繼可  
を為夫成功の若  
は則ち天也君  
彼を如何せん哉  
疆て善とて為人

狄人侵之去之岐山之下居焉非擇而  
取之不得已也  
文公又問て曰く今齊より吾國近く  
薛の地は城を構はるるを以異心  
あふらん如何せんや孟子の曰く昔者周の大王は邠の地を都  
とせしに狄人毎道よりして常小攻侵せり大王の仁心民を憐し  
依て去て岐山の下へ遷居りこれ場所を  
擇し小あらん已とと得ざるなり  
苟為善後  
世子孫必有王者矣君子創業垂統  
為可繼也若夫成功則天也君如彼何  
哉疆為善而已矣  
右大王の例もあり凡そ以善行  
を以て天道を守れば假令我身  
の上小福を蒙らざとも後の子孫へ報て盛なるべしと大王乃  
如くその孫武王小至て天下の主となるむのよし君子蒙ん  
と欲し必も善行を垂施し統緒の後へ傳繼しむる為なり  
然ども其功の成就もいと不口と天命は任まると今王の力齊と

滕の文公問て曰く  
滕ハ小國多力も  
竭て以て大國に  
事則ち免るも  
得不得を如何  
て則ち可かしく  
孟子對て曰く昔  
者大王邠は居狄  
人之を侵を去て  
事小皮幣を以  
て免るも事  
大馬を以て免る  
とと得不得之事  
に珠玉を以て  
免るも事  
ハ其耆老と屬

滕文公問曰滕小國也竭力以事大  
國則不得免焉如之何則可  
又問て曰く心一といふカと竭て齊楚へ交を為ると遂は禍を  
免るも如何せんや  
孟子對曰昔者大王居邠狄人侵之事  
之以皮幣不得免焉事之以犬馬不得  
免焉事之以珠玉不得免焉乃屬其耆  
老而告之曰狄人之所欲者吾土地也  
吾聞之也君子不以其所以養人者害



而して之を生きて  
曰く狄人之欲する  
所の者ハ吾土地  
也吾之を聞君  
子ハ其人を養ふ  
所以の者をも以て  
人を害せんとす  
子何ぞ君無と患  
ん我將之を去ん  
と將邠を去梁山  
を踰岐山之下小  
邑して居邠人曰  
く仁人より失たふ  
可うし不と之を從  
ふ者市に歸る  
或ひと曰く世守之

人二三子何患乎無君我將去之去邠  
踰梁山邑于岐山之下居焉邠人曰仁  
人也不可失也從之者如歸市

對て曰く右小述一大王ハ狄人動とれバ攻侵セしめ  
程ハ獸の皮幣等を貢物と進物としその馬珠玉など小  
及べし遂に國を吞との本相大王より國中の耆老を  
屬して曰く狄人の望ハ吾土地なりそれ土地ハ百姓を養ふ  
元なり小忍を我とし不徳の君なきと別事あると梁山  
踰岐山の下に立さる然し邠の百姓ども仁君なき失べし  
とて就從て到る市中の群集の如し  
或曰く世守也非身之所能為也效死勿  
去又或人の曰く夫國家ハ或ハ天子より賜ふ先祖合戦死  
去がと尽して創業するなれば巴が世なりと一分の心より

身之能為所非  
死を效して去勿  
君諸斯二の者と  
擇  
命の平公將出  
と將嬖人臧倉者  
者請て曰く他日君  
出則ハら必と有司  
小之所を命と今  
乘輿已加馬也  
司未之所を知未  
敢て諸公の曰く將  
孟子に見んと  
將曰く何ぞ哉君  
の為所身と輕ん  
トて以て匹夫  
先づ者以て賢

自由なるを然バ討死を為すも君請擇於斯二  
者右大王の民を愛する例う不然先祖の為私とて  
○天朝を以て論じて死を致すと武道の本意なり  
功名を為の期ありバ大謀の為小く忍ぶる又ある尤考  
魯平公將出嬖人臧倉者請曰他日  
君出則必命有司所之今乘輿已駕矣  
有司未知所之敢請公曰將見孟子曰  
何哉君所為輕身以先於匹夫者以為  
賢乎禮義由賢者出而孟子之後  
喪踰前喪君無見馬公曰諾



為平禮義賢  
者由て出而  
孟子之後の喪  
ハ前の喪は踰君  
見ると無公の曰  
諾

樂正子入て見て  
曰く君奚為ぞ  
孟軻を見不曰  
或ひと寡人は  
告て曰く孟子之  
後の喪ハ前の喪  
往て見へ不と曰く  
何ぞ哉君の謂所  
踰者前士と  
後大夫

を以て一前二三  
冊を以て而して  
後五冊を以て  
與曰く否棺  
擲衣衾之美を  
謂く曰く謂所  
踰る小非貧富  
司どう不也  
樂正子孟子に見  
て曰く克君と告  
君來て見んと為  
壁人臧倉者  
有て君を沮む  
君是を以て來  
も或ハ之を使ひ止  
も或ハ之を尼し行

平公魯國の君なり此段曾て樂正子といふ賢人の勸め小  
より平公の曰孟子見んと將て出馬ある処驛卒のものを  
名を臧倉といふ者曰く他日君の出駕ハ有司何所  
之との命あり今乘輿已加馬矣然小の之所知未忍を  
かう敢て請うとかり平公の曰く孟子見ると為  
賢者と以為て身を輕しめぬやの孟子ハ父に孝なり  
と見ると前より父の喪事ハ輕し後母の喪事ハ踰絶  
平公信たりと諾しぬ

見曰君奚為不見孟子軻也曰或告寡  
人曰孟子之後喪踰前喪是以不往  
見也曰何哉君所謂踰者前以士後以  
大夫前以二鼎而後以五鼎與曰否謂

棺擲衣衾之美也曰非所謂踰也貧富

不同也 平公の往のむら故に樂正子さうして奚為に孟子  
母を葬しとるむらと問ふ公の曰く或人の父の喪事ハ  
何事小や君の踰ると仰あるハ孟子も父の時ハ平士とかり  
士の礼として與も三ツを用と後ハ大夫の位より一也與も  
五ツして有し事小や公の曰く否その事小あるは夫ハ士と  
大夫の分あるは言べことなり只棺擲や飭衣衾ハ羨しき  
をいふかり正子の曰くそれを踰るとして難むとるは

樂正子見孟子曰克告

於君君為來見也壁人有臧倉者沮君

君是以不果來也曰行或使之止或尼

之行止非人所能也吾之不遇魯侯



止人の能ざる所  
非吾魯會候  
小遇不天也臧  
氏之子焉之  
能予小遇不使人

天也臧氏之子焉能使予不遇哉

克ハ正子が名なりそのら正子孟子へそのことと語て曰く克が  
告上り故よりて君来て先生見んとあり小臧氏これ  
沮止たり是以来と果ハほどと嘆々孟子喩説ありて曰く  
中くさやの理ある凡人の身吉凶禍福又ハ物の遂と遂  
ざるの道ハ天命として定ありて人の力小能ざる者なり人の行  
も止まる小自然とさや小使るのたかり吾魯公は遇ざるハ  
道の行ハさぬや中魯公の不幸小正道を聞ゆるのたかり  
ざるたり則ち是を天命といふ焉臧氏の子の能あるや

孟子卷之一畢

曰非也

て



